

「アナログとデジタルの狭間を生きる」

小田垣 享

現在私は歯科技工所を運営しながら、歯科技工士養成校の非常勤講師やメーカー及び学会で指導技工士としても活動を行っている。8020 運動により、欠損は減りつつあると思われるが、高齢者の欠損補綴患者はまだ多いように感じられる。そのため義歯は超高齢化社会に伴い極端に減少することはないと思われる。

しかし、歯科技工士不足は依然として改善されず、それを解消するためにデジタル技工で何とか対応すること自体に異論はないが、それだけで果たして対応できるのだろうか？

歯冠修復やインプラント技工等では既にデジタル技工は確立されていると思われ、近年義歯技工においてもデジタル化は普及してきている。だが、有床義歯技工はデジタルライゼーションだけでアナログ時代の問題は解決されるのだろうか？

一般企業との労働格差や個人事業主がほとんどの業界で、事業内容の新たな拡大と就業者の高齢化問題等、それらについて会場の方々と討論したい。